

---

# 夢でまたあいましょう

芥子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢でまたあいましょう

### 【Nコード】

N6482C

### 【作者名】

芥子

### 【あらすじ】

健はどこにでもいる小学生ただ違うといえば夏休みが嫌いという事ぐらいだ、宿題を早く終わらせ毎日寝ていると、不思議な夢を見た、

単調な毎日をさらに単調にする期間・・・それが夏休みだ

僕は毎年この期間が一番嫌いだったかもしれない、学校が休みというのは嬉しいがこれと言って楽しいこともなくただ暇な日々が繰り返されると思っていた

あの事が起きるまでは

7月の下旬、僕は9時過ぎに目を覚ました。外は太陽が照り続きセミの声が嫌ほど聞こえてくる

そんな中寝ぼけた顔で僕は朝食のコーンフレークを食べていた

両親は共働きで起きたら二人ともおらず、姉は多分部活にいつているのだろう

家はガランとしており、セミの声だけが聞こえるその音を消すためテレビをつけた

テレビではニュースが流れており、聞いたことのない村の川で溺れた子供を助けたニュースに、少女が行方不明になったという内容が報道されていた

毎年夏になったら流れるニュースだなと思った

テレビの電源を切りコーンフレークの牛乳を飲み干すと僕は部屋に戻った

やることはない、宿題はもうすでにやり終えた、暇を遊ぶ僕はとりあえず寝ることにした

クーラーをつけてもう一眠りにつく

思ったより寝つきが良く気がついたら寝ていた・・・

『ここはどこ・・・？』

見たことのない公園、遊具とかおいてあるようなのではなく散歩道みたいな公園でとてもキレイに整備されている、

とりあえず歩いてみる、ひたすら歩くが誰一人として会わない、さらに歩いていると後ろから

『すみません』

と声をかけられた、内心驚いたが後ろを振り向くと同じ年ぐらいの女の子が立っていた

『まさか、ここに人が来るなんて思ってもいなかった』

彼女はビックリした様子で彼女は言った

僕は漂流していて救助された気分だった

『あのココは一体どこなんですか』

僕は真っ先に彼女に聞いてみた、彼女は首を横にふり知らないと答

えた

『ココからでられなくなったらどうしよう』

焦っている僕に対し彼女は

『それなら簡単よ』

と言った

『どうやって?』

と聞くと

『ここで話すより向こうで話さない?』

と彼女は屋根のついた休憩所を指差した

確かにここは暑い、という事で聞きたい事は山積みだが、我慢して休憩所に向かった

その休憩所は木の屋根に木のベンチ、それにテーブルまであった、ベンチに座ると僕は真っ先にあの質問をした

『どうしたらここから出れるの?』

『その内わかるよ』

と聞いた瞬間、急に彼女が歪んでみえた、というより景色全体が薄

くなっていた

ベットから起き上がる僕、時間を見ると2時間経過していた

『良かった夢だったんだ・・・それにしてもあの子可愛かったな』

なんだか急に胸が熱くなった・・・また会いたいそう思えた

深呼吸をし、もう一度寝ることを決意した、寝起きという事もあり簡単に眠りについた

またしても同じ公園の休憩所、そこには彼女がキョトンとした顔でベンチに座っていた

『また来たの・・・?』

僕は少し恥ずかしくなった

『けど会いにきてくれてうれしいな、なにかお話しよ』

彼女が嬉しそうにそう言った、僕は二つ返事でOKをした

『君は名前なんて言うの?』

『僕の名前は健・・・健康一番って覚えて』

『おもしろい覚え方、私は恵、メグって呼んでね』

健『そういえばメグさんはどこに住んでるの?まさかここじゃないよね?』

恵『当たり前でしょ、私は 県の○○って所に住んでるの』

健『え！？隣県！！僕は 市って所に住んでるんだけどそこ知ってますか？』

恵『うん知ってるよ、確かそこには大学病院があるよね、私そこで入院してたの』

健『へえそうなんだすごい偶然だね』

その後の話で、メグは僕より一つ年上で、幼少の時病弱で今でもたまに入院しているという事を聞いた

そして何気ない会話、夏休みが楽しいというメグ、僕はとりあえずあいつちを打ったが僕は夏休みが好きになれない

両親は共働きで旅行にいった事などない、それに友人も少ないからあんまり遊ばないからだ

けれどここでメグとしゃべっている時間はとても楽しかった

この時間がずっと続けばいいのと思った瞬間メグが薄く見えてきた、帰りの時間だ

僕はメグにバイバイと言い手を振った

目が覚める・・・あれからまた2時間が経過していた

起きて冷蔵庫から麦茶を飲み冷静考える

今思えばこれは僕の夢で、僕の意識のみで構成されている、メグは現実には存在しないのだろう

なんだか急に切なくなった、メグは夢の中でしか会えない・・・

けれど夢の中で会えるならもう一度寝よう！

ベットに入り寝ようとしたが目を瞑っても寝れずに夜になっていた  
両親が帰ってきて夕食をとる、そして夜になり眠りについたが、ついにメグの夢は見れなかったが

何日か過ぎ朝寝るとあの公園に行く夢を見ることがわかった

時間によつてはメグがいない時もあった、いつもの休憩所でメグと会ったときに聞くとメグも僕がいない時があるという

多分、それは僕が寝ていない時で二人とも寝ているときのみ会えるのだと確信した

僕は無理やり寝ているのだがメグは今は入院をしております朝も寝ているのだという

それはメグは実在しているという事で僕は内心ですごく喜んだ

恵『健君・・・すごく嬉しそうだね、何かあったの？』

健『いや・・・まあそれなりにいいことがあったから』



恵『そうなんだ〜好きな女の子でもできたの?』

健『違うよ』

照れ隠しだと気づかれないようにそっけなく言った

恵『本当に? 確かに健君でキスもした事なさそうだもんね』

僕は思わず噴出したじゃあメグはあるのかと聞くとメグは

恵『私はあるよ、健君、私とキスする?』と言ってきた

僕は胸がドキドキしだした僕は、バカにするなど言い放つとメグは顔が赤いよと言いつつ笑い出した

なんとも楽しい一時、これが現実ならどれだけ幸せだろう、いつの間にかメグに恋心を抱いていくようになった

これほど寝るのが楽しいと思えた事がない

もうメグと会って10日が過ぎようとしていた

僕は朝寝るのが日課となっていた、そして今日もメグとの会話のはずだったが今日の夢は違った

僕が家から出て行き、自転車でどこかに向かう夢、ひたすら自転車を漕ぎどこかに目指している、見覚えがある風景

そしてさらに漕ぐと、いつもの公園に着いたところで夢が覚めた

この日からメグと会う回数より自転車を漕いで公園に行く夢の方が多くなった

その事をメグに話すといきなり黙り込んだ

最近メグの顔色がすごく悪い、元々病弱だからすごく心配だ

色々話し僕が帰ろうとするとメグが

『健君と会えてすごくよかったよ！実は私健君の事・・・』

そこで目を覚ました、僕はすごくメグと会いたいという衝動に駆られた

次の日僕はついにその公園まで行くことを決意した、何回も夢を見続けたことでその道を完璧に把握したのだ

自転車にまたがりひたすら漕ぐ、夢で見た景色を次々と越えていく  
一時間ほど漕いだらうか、そこは町外れで公園のある場所についたがそこは公園ではなく広い空き地だった

『確かにここだよな・・・？』

僕はその空き地を見渡したそしたら空き家が一軒あった、僕はなんとなくその空き家に入る

扉を開けると廊下は長年使われたことがなさそうで古い雑誌が散乱していた

そして部屋のドアをあけると・・・

埃まみれの部屋、ベッドの上に女の子が縛られた状態で寝かされていた

メグだ、顔はよく見えなかったがなんとなくそんな気がした

近づくと目隠しをされ、両手を縄で縛られている僕はそれらを解いた

メグは気絶もしくは睡眠薬が何かで眠らされているのだろうか、ぐったりとしている

負ぶっているメグからかすかに心臓の音がするのが唯一の救いだった

僕はそのまま小屋から逃げ出し警察に行きいきさつを話した

それから駆けつけた警察により犯人が逮捕された、犯人は食料の買出しにいておりあの時小屋にいなかったらしい、本当に運が良かった

次の日からやれ警察やメグの両親から感謝の言葉をいただいた。

新聞社にも色々追いかけられた

暇だった僕の夏休みは一瞬にして慌しくなったが

残念な事にあれ以来公園の夢は見なくなった

どうやらメグはあれから心労などが重なり病院に戻ったらしいが見

舞いにいけるような状況ではないらしい。

そりゃそうだろうあんなショックな出来事があったのだから

それから2週間が経ち、夏休みも終わりがけの頃、僕はいつもどおり寝ていたら急に見覚えがある風景がでてきた。メグと出会った最初の公園だ

僕はベンチの方へ走っていった。そこにはまたしても見覚えがある女の子が座っていたメグだ

「メグ!!」

僕がそう叫んだ、するとメグは振り返った。あの時と変わらないメグの姿

「健君・・・本当にありがとうもし健君がいなければ私・・・もつとひどい目に合ってたと思う、もう私大丈夫だから・・・その明日お見舞いに来てくれるかな？」

僕はすぐに首をたてにブンブンと振った。

次の日すぐに自転車にまたがり隣の市へ向かった、この押さえ切れない気持ちと共に

<終>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6482c/>

---

夢でまたあいましょう

2010年10月11日02時15分発行